シテキなもの

滑瓢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シテキなもの

【Ｎコード】
Ｎ０５８４Ｙ

【作者名】
滑瓢

【あらすじ】
タイトル通りである。とにかく書いてみようと思った。書いてみたかった。

マエガキ

ほとほとこの世界で生きていくのに疲れてしまった私は、これから生きていく世界を自分で作り出すことにした。

・・・なんて書き出しは、少し大げさなんじゃないかと自分で思う。こんなこと出来たら神様だ。この世界で生きていくのに疲れなんかしないだろうに。要するにかっこ悪い言い方をしてしまえば現実世界への逃避なんていう甘っちょろい方法で私はこれから生きていくことにしたのである。それにしたって『世界を自分で作り出す』なんてよくも言えたものだ。なかなかに壮大かつ非人間的行為であるが、しかし創作だとかクリエイトという単語に置き換えてしまえばあら不思議、あっという間に人間的なありふれた行為となる。そう、もっと簡単に言ってしまえば私は創作をして、現実世界への逃避を試みようとしているのである。創作といっても絵画や小説、漫画などいろいろあるのだがしかし私は今のところ絵の才能がまるっきしないということだけははっきりしているのだ。絵画や漫画などというジャンルなどに手を出したりはしない。そして残った選択といえば『小説』ぐらいのものになる。ぐらいのものなどと抜かしてしまうと世のクリエイトたちに睨まれそうなものだが、しかしこんな私的な小説、だれも注目してはいないしましてや出版もされていないのに世のクリエイトたちに私の小説が目に付くなどもっての他、有り得ないわけである。

はじめは脚本にしようか小説にしようか迷ったものだが、しかし未だにその判断は付かずじまいだ。先ほど『小説』などいう単語を二度三度チラリしてみせたのに関わらず『脚本』などという通常の人たちには少々読みにくいジャンルの読み物に手をつけようとしているのは、私が現役の演劇部員ということに起因している。演劇の世界に手を踏み込んでしまった私は単純ながらその世界にすっかりとあてられてしまい果ては劇作家などという大それた、成功しなけ

ればなかなか安定しない生活を送ることになるであろう邪道な道に進もうかという血迷った未来予想図を思い浮かべている始末なのだ。
　昔から生粋の普通人でありふれた人間であるのにかかわらず変人になろうとしていた。普通の人生を歩むとかいうのがどうしても嫌だった。フリーターでも何でもいい、好きなことを好きなように生きて生きたい。そう人一倍強く願う奴が私であった。就職という言葉が嫌いだ。大学に入るにしてもそこは就職がどうのこうのあそこは就職が有利やら不利やら、そんなごちゃごちゃした考えで私は大学を選びたくはなかった。言ってなかった。ちなみに私は高校2年生である。胸張って言おうか、『女子高校生』である。ふふふ、このまぶしいほどに輝かしく見えそうな身分なのだから、胸張ってもいいのではないか？と思いながら明かした身分である。実際は彼氏もいなければ可愛くもない、なにやらのんぼりしたモサい高校生だ。若さの輝きひとかけらも見えないグレイな感じである。
　この作品はそんな女子高校生が書いた、現実やら妄想やらが入り乱れた私的な日記と思っていただければいいだろう。こんな偉そうな文体も、いつまで続くやらさっぱり見当がつかない。つまるのところ何でもありの小説であったり脚本であったりするものである、という風になるのだろうかこれは。何ぶん気まぐれな私だから、今はこんなにやる気になってパソコンのキーボードカチカチしたりしているけれどもいつの間にやら飽きてしまってさっぱり投稿も無くなってしまったりするかもしれないしかと思えば何ヶ月かした後にある日急にまた投稿があったりするのかもしれない。先ほど文体のことについても触れたが、自分をあまり持ってないというか自分なりの表現の仕方が今だに掴めていない私はその都度読んでいた小説やら脚本やらに文体を右往左往されて、文体が西尾維新になったり入間人間になったり伊坂幸太郎になったり森見登美彦になったり万城目学になったりその他色んな作者になってしまうことが常なのだ。現在の場合、読んでいるのは松尾スズキ、作。『宗教が往く　下』の文庫本。私の今の文体は松尾スズキだ。こんな風に前書きとして

自分を語ってしまうのもその影響だ。なんと影響されやすい。松尾スズキさん、知っているだろうか。どうでもいい補足だが、私は大人計画が好きで、今のところ私の中で見に行きたい劇団第一位の座だ。知っているだろうか、大人計画。『フクスケ』という作品で私は初めて大人計画に出会った。かなりの衝撃である。今まで高校演劇という生ぬるい世界しか知らなかった私には、もうすんげぇ衝撃である。学校でしか音楽に触れていなかった人間がロックを初めて聞いたときのような衝撃である。もともと高校演劇には個人的に温い温いＮＨＫみてぇだと思っていた分、こんな衝撃を人に与えるような舞台を作ってみたいと心底思った。高校演劇の人、ごめんなさい。少なくとも私の知っている中での『高校演劇』である。日本全国にはもっとすごい高校演劇があるのだろうか。まぁ知らんけど。

そんなこんなである。どんなこんな？

まぁ、今まで私が書いてきた全てのことに関してである。

興味があれば読んでみてください、と。

ただし批判はやめて欲しい。

向上意欲は多大にあるのだが、しかしいかんせん人に真面目に私を否定されてしまったら、私の自信はあっという間にすぼみ消えてしまって復興にかなりの時間を有するだろう。

自分の作り出した世界でさえ自分を否定されてしまって、私はまた新たな現実逃避への道を探さなければいけない破目になってしまうのだ。

以上、前書き終了。

書きたいことは、全て書いた。・・・今のところはだけど。

これからの話は、未だ決まっていない。

ラブテキなもの　1（前書き）

ちょっとラノベください、あと私のあったらいいな妄想も交えたお話。

ラブテキなもの　1

それは昨日のことだった。たまたまツタヤに来ていた私が見たのは、同じクラスの佐々倉くんの姿だ。ジャージ姿にTシャツだけのラフな格好で、海外ドラマのコーナーをふらふらと歩きながらぼんやりとDVDの棚を見上げていた。佐々倉くんとは、あまり話さない。というか男子となんて滅多に話したこともない。何故かって言うとそりゃあこっちが聞きたいわボケってな位なわけだが、そもそも超絶人見知りな私が話したことも無い男子に自ら話しかけられるわけもなく、話しかけてもらいたいのは山々だが、しかしどうにも上手くいかず声をかけられたといってもそれはたとえば私が何かを落としてしまって気付かないときだったりする。要するに雑談というものを男子としたことがない。そんなものがなければ、親しくなれるわけがなかった。そうして二年生の二学期現在に至る。どうやら私は男子から見て遠巻きにでも少し普通の女の子とは違う変人さんということで迂闊に近寄ろうともされないのだ。どうしてそうなる。何か私がしたというのか。確かに他の女子たちとは違い愛想も悪く人見知りという特性故に見知らぬ人とは無表情であまり笑えもしない。休み時間では本が一番のお友達。一人でひたすら読書に没頭して、無表情で何を考えているか分からない・・・それがおそらく私の印象。どうよこれ、話しかけてよ！私だって寂しいわくそが！

佐々倉くんとは一年生でも一緒のクラスだったのだけれども、考えてみれば交わした言葉など作文用紙の一行分にも満たない程度だ。隠れようと思った。さっさと姿の見えないところまで行って、アニメコーナーへ・・・しかし私は見てしまった。そそくさとその場を通ろうとする私は、もちろん佐々倉君に全身全霊注意を傾けていたもんだから、佐々倉君の動向ひとつひとつに神経を光らせている。こっちくんなこっちくんな振り向くでないわ！と祈っていると佐々倉くんは背中を向けてスタスタと歩き出した。またそれが実にナチ

ュラルな動きであったので私もその様子を安心して見送っていたのであるが、しかしあろうことか佐々倉くんがナチュラルな動きでスタスタ向かった先は十八禁コーナーであったのだ。まぁ突き当たりにあるのでそこからスイーッと横へ曲がる可能性だって大いにあった。私はその可能性を信じて疑わず、そしてもう一つの可能性である十八禁コーナーへは全くの予想がなされていなかった。行きなれたところでそこにある十八禁の青い暖簾などあってないような壁である。そしてその壁に、いとも容易く佐々倉くんは入っていった。

わーお。

ハリポッターか。あれか・・・9と3／4番線かな？あーそっか、日本てこんなところにあったのかー。んー・・・知らなかった！初耳だね！そんでホグワーツへと繋がる列車がポッポーと待機して・・・・・そうもねぇ！ないわ！想像したけどさすがにこの想像はないわ！どんなファンタジーですか。繋がる世界はめくるめくエロの世界！

というわけで、昨日はツタヤの十八禁コーナーへと入っていく佐々倉くんを目撃した。

ラブテキなもの　1（後書き）

これいつまで続くのかな。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0584y/

シテキなもの

2011年11月26日20時50分発行